



TITLE:

唐寓之の亂と士大夫

AUTHOR(S):

川合, 安

---

CITATION:

川合, 安. 唐寓之の亂と士大夫. 東洋史研究 1995, 54(3): 443-471

ISSUE DATE:

1995-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154539>

RIGHT:

# 唐寓之の亂と士大夫

川 合 安

はじめに

一 唐寓之の亂の顛末

二 南齊・武帝政權の戸籍檢查政策と民力休養論

三 蕭子顯『南齊書』の立場

おわりに

はじめに

南齊の永明三年（四八五）冬に、浙江（錢塘江）西岸におこって、翌年正月に鎮壓された唐寓之の亂については、專論が少なく、管見の限り、賴家度「南朝唐寓之所領導的農民起義」（『中國農民起義論叢』生活・讀書・新知三聯書店、一九五八所收）と、朱大渭「唐寓之起兵的性質是農民起義嗎？」（『中國農民戰爭史論叢』第一輯、一九七九所收）とを参照することができたにすぎない。賴家度氏は、唐寓之の亂參加者が「白賊」と稱されたこと<sup>(1)</sup>から、この反亂を白籍に登載された「自由」農民による農民起義と考えた。賴家度氏の「白賊」を白籍と結びつける説は、白籍に對する誤解に基づくものであって、この點については、朱大渭氏が指摘している。すなわち、白籍とは東晉時代に行なわれた僑民の臨時の戸口簿であって「白賊」とは關係がなく、「白賊」の白とは一般的に官爵をもたない庶民を指すのであり、その中には農民のみならず庶族地

主も包括されるという（一七五頁）。朱大渭氏は、唐寓之の亂參加者は、主として庶族地主であると考え、この反亂を士族地主と庶族地主との間の財産と權力の再分配をめぐる鬭争であり、農民起義でも農民戦争でもなかったという見解を示している。<sup>(2)</sup>このように、従来の研究では、亂の主たる擔い手が農民なのか、庶族地主なのかという點に關心が集中してきたので、まず反亂の經過をたどって、この擔い手の問題について考える。さらにこの反亂の背景とされる戸籍検査政策を取り上げ、この政策に對する當時の皇族や官僚等いわゆる士大夫の議論、<sup>(3)</sup>さらにはこれらの議論を詳細に記録した蕭子顯『南齊書』の立場に考察を加え、南朝の政治・社會における知識人の役割に迫ってみたい。

## 一 唐寓之の亂の顛末

唐寓之の亂に關する最も詳細な記録は、『南齊書』卷四四沈文季傳にみえる。<sup>(4)</sup>これによって、唐寓之の亂の經過を追うことからはじめよう。

永明四年、吳郡太守の沈文季に會稽太守への移動が發令されるが、亂はその直前におこっている。本傳には、

是の時、連年檢籍し、百姓怨望す。富陽の人唐寓之、桐廬に僑居し、父祖相い傳え圖墓もて業と爲す。寓之自ら其の家の墓に王氣有りて、山中にて金印を得たりと云い、轉た相い誑惑す。三年冬、寓之黨四百人を聚め、新城の水に於いて商旅を斷ち、黨與近縣に分布す。新城令陸赤奮・桐廬令王天愍、縣を棄てて走る。寓之、富陽に向かい、人民を抄略し、縣令何洵、魚浦の子邏主從係公に告げ、魚浦村の男丁を發して縣を防がしむ。永興、西陵戍主夏侯曇義をして將吏及び戍の左右の埭界の人を率いて兵を起こして赴救せしむ。寓之、遂に富陽を陷せり。會稽郡丞張思祖、臺使孔矜・王萬歲・張繇等をして配するに器仗將吏白丁を以てし、永興等十屬を防衛せしむ。文季も亦た器仗將吏をして錢塘を救援せしむ。寓之、錢塘に至るや、錢塘令劉彪・戍主聶僧貴、隊主張玠をして小山に於いて之を拒ましむるも、力敵せず戰敗す。寓之、抑<sup>(5)</sup>〔柳〕浦に進みて岸に登り、郭邑を焚き、彪、縣を棄てて走る。文季、又た吳・嘉

興・海鹽・鹽官の民丁を發して之れを救わしむ。賊兵を分かちて諸縣に出でしめ、鹽官令蕭元蔚・諸暨令陵琚之と並びに逃走し、餘杭令樂琰戰敗して乃ち奔る。

とある。右の記載を整理すると、大略、次のようになる。①亂の背景に戸籍検査に對する不滿の昂揚がある、②唐寓之は、吳郡・富陽縣の人だが、同郡の桐廬縣に僑居する、いわゆる風水先生で、風水説を利用して仲間を集めた、③反亂軍四百人は、まず吳郡の新城縣において浙江を通行する商船を遮斷して、新城縣と桐廬縣を占領し、④反亂軍は浙江を下って富陽縣にむかい、富陽縣令は防衛策を講じ、浙江東岸の永興縣(會稽郡)からも西陵戍主が救援に赴いたが、富陽縣は反亂軍に占領された、⑤會稽郡では、永興をはじめとする十縣の防衛體制をしき、吳郡太守沈文季も錢塘縣救援の措置をとった、⑥反亂軍が錢塘に到着すると、小山の防衛線を突破して、柳浦から上陸して、市街地に放火したので、縣令は逃亡した、⑦沈文季はさらに吳・嘉興・海鹽・鹽官諸縣の民丁を徵發して錢塘を救援させるが、反亂軍は、錢塘から近縣に出撃し、鹽官縣(吳郡)・諸暨縣(會稽郡)・餘杭縣(吳興郡)を占領し、その際、鹽官・諸暨の縣令は戦わずに逃走し、餘杭縣は戦って敗北してから逃走した。ここには、錢塘縣をはじめ浙江西岸一帯と一部浙江東岸(諸暨縣)を反亂側が占領するまでの経過が述べられており、とくに各縣令がどのような對應をしたかが明記されている。これは、各縣令の責任を問うために御史臺が作成した調書によったためであろう。⑧ここで注目すべきは、まず、亂の首謀者唐寓之が風水先生であること、第二に、反亂軍はまず浙江を通行する商船を遮斷し、浙江を下って富陽・錢塘縣を占領しており、柳浦から上陸していることから明らかなように、船を主たる移動手段としていること、⑨であらう。これらの點から、少なくとも亂の中核となったのは風水先生や水上労働者など非農業民ではなかったかと考えられるのであり、戸籍検査によって不利益をこうむった「庶族地主」や農民の呼應があつたにしても、これを「農民起義」あるいは「庶族地主」對「士族地主」の鬭争と規定することには躊躇をおぼえるのである。唐寓之の組織した政府の構成からも、農民ないし地主の政府という要素はみられない。唐寓之政府については、前引の記載に續けて、

是の春、寓之 錢塘に於いて僭號し、太子を置き、新城戍を以て天子の宮と爲し、縣解を太子の宮と爲す。弟紹之を揚州刺史と爲し、錢塘の富人柯隆を尙書僕射・中書舍人・領太官令と爲す。鉅數千口を獻じて寓之の爲に仗を作り、領尙方令を加えらる。

とあり、永明四年正月、唐寓之は錢塘で卽位し、皇太子を置き、錢塘縣の新城戍を天子の宮殿とし、錢塘縣の廳舍を東宮とした<sup>(11)</sup>。さらに、弟の紹之を揚州刺史に、錢塘の富人柯隆を尙書僕射・中書舍人・領太官令に任命し、柯隆が鐵材を提供して武器を製造すると、武器工場監督官たる尙方令も領職させている。柯隆は、反亂軍への重要な資金提供者とみられ、宮廷の臺所を管掌する太官令の領職にもそのことは現われているが、そのみならず宰相ともいべき尙書僕射を本官とし、皇帝祕書の中書舍人も兼ねているのを見ると、反亂軍には政府を組織するのに必要な人材―行政事務に必要な知識をもつ者が缺如していたことが看取されるのであって、この點に、いわゆる「庶族地主」層の廣範な結集がみられなかったことが示されていると考えられよう。また、資金提供と反亂軍政府の事務とを一手にひきうけた「富人」柯隆は、大量の鐵材を提供していることからみて、商人とみなすべきであり、この政府の構成からも、非農業民主導の反亂という性格がうかがいがってくるのである。

唐寓之が卽位して反亂も最高潮に達し、浙江をさかのぼった東岸にある東陽郡までが反亂軍の手におち、東陽太守蕭崇之と東陽郡の首縣長山縣の令である劉國重は、戦死をとげる。反亂側は、さらに太守不在の會稽郡（首縣山陰縣）の占領をめざして進軍するが、途中の浦陽江ではじめて大敗を喫する。反亂の情報に接した朝廷からも、「禁兵數千人、馬數百匹」が派遣され、この官軍が錢塘に到着するや、一戦にして反亂軍は敗北し、唐寓之は斬殺されて、亂は收束する。ところが、亂の鎮定の際の官軍による一般民衆に對する掠奪行爲が問題化して、武帝の寵將陳天福の處刑にまで發展する。さらに、亂の際の郡・縣長官の對應の不手際が御史中丞によって彈劾され、反亂の際に戦わないで逃走した鹽官令蕭元蔚らが免官となった。

以上が、沈文季傳から知られる亂のおおよその経過である。亂の中核をなしたのは、農民でも地主でもなく、風水先生・水上勞働者・商人などの非農業民であることがうかがわれる。一方、從來の研究が重視してきたように、戸籍検査政策に對する不滿が亂の擴大の背景にあつたことも事實で、『南史』卷七七恩倖・茹法亮傳に、

三吳の却籍せらるる者 之れに奔り、衆三萬に至る。

とみえる「衆三萬」の中には、農民や新興豪族も含まれていたかもしれない。南齊王朝が推進した戸籍検査政策については、民力休養の立場から緩和を求める意見も提出されているので、章を改めて、戸籍検査をめぐる記述について考察を加えよう。

## 二 南齊・武帝政權の戸籍検査政策と民力休養論

劉宋末に破綻していた財政を再建するの必要に迫られていた南齊の初代皇帝、高帝（蕭道成）は、まず戸籍記載の整頓に問題解決の糸口を見出そうとし、即位早々、黃門郎虞玩之と驍騎將軍傅堅意に戸籍記載の不正摘發を命じ、建元二年（四八〇）には、次のような詔を發して、戸籍記載の不正の現狀を述べ、朝臣らにその對策を諮問している（『南齊書』卷三四虞玩之傳）。

黃籍は、民の大紀、國の治端なり。このごろ氓俗巧僞、日を爲すこと已に久しく、乃ち爵位を竊注し、年月を盜易し、三狀を増損し、實襲すること萬端に至る。或いは戸存するも文書已に絶え、或いは人在るも反つて死叛に託し、私に停まれるも役に隸すと云い、身強きも六疾と稱す。編戸齊家、此くの如くせざるもの少なし。皆な政の巨蠹、敎の深疵なり。比年却籍して改書せしむると雖も、終に實を得ること無し。若し之れを約するに刑を以てすれば、則ち民僞已に遠く、若し之れを綏んずるに德を以てすれば、則ち殘に勝つこと未だ易からず。卿ら諸賢並びに深く治體に明らかなれば、各々嘉謀を獻じ、以て澆化を振わすべし。又た臺坊の訪募、此の制近からざれば、優刻素より定ま

り、閑劇常有り。宋の元嘉以前、茲の役恆に滿ちたるに、大明以後、樂補漸く絶ゆ。或いは寇難頻りに起こりて、軍薩多かり易きに縁りて、民庶利に従い、坊に投ずる者寡きなり。然れども國經未だ變わらず、朝紀恆に存じ、相い揆りて言へば隆替何ぞ速かなるや。此れ急病の洪源、晷景の切患、何を以て科算し、斯の弊を革めんや。

戸籍記載の不正行爲とは、具體的には、まず、ありもしない官爵を記入したり、官爵に敘任された年月を書き替へたりして、力役免除の特權を獲得することで、その書き替へは、三狀（父・祖・曾祖の官爵にかかわる注記<sup>(13)</sup>）について行なわれていた。そのほか、戸の記載がすべて抹消されていたり、ある人物が存在しているのに死亡あるいは逃亡していることになっていたり、私家にとどまっているのに役に従事していることになっていたり、健康なのに病身とされていたりする事例があげられている。このような不正に對して、「却籍」（本縣に返却）して書き改める措置をとってきたが、いっこうに成果があがらないので良策を述べてほしい、というものである。以上が詔の前半部分であり、後半では、軍勳取得者の激増がまねいた「臺坊」<sup>(15)</sup>の役の應募者不足についての對策をもとめている。この諮問に答え、虞玩之は次のように上表した。

宋元嘉二十七年の八條取人と、孝建元年の書籍とは、衆巧の始まる所なり。…今陛下日吁れて食を忘れ、未明に衣を求め、詔 幽愚に逮びたれば、謹んで妄説を陳べん。古えの共に天下を治むるは唯だ良二千石のみにして、今治を求め正を取らんと欲すれば、其れ勤明の令長に在り。凡そ籍を受くるに、縣 檢合を加えず、但だ州に封送するのみにして、州 檢して實を得れば、方めて縣に却歸す。吏 其の賂を貪り、民 其の姦を肆にし、姦彌々深くして却彌々多く、賂愈々厚くして答愈々緩し。泰始三年自り元徽四年に至るまで、揚州等九郡の四號の黃籍、共に七萬一千餘戸を却し、今に于て十一年なり。而るに正す所の者 猶お未だ四萬ならず。神州奥區すら、尙お或いは此くの如ければ、江・湘諸部は、倍々念うべからず。愚謂えらく宜しく元嘉二十七年籍を以て正と爲すべしと。民 法を愜ること既に久しければ、今建元元年の書籍にて、宜しく更めて明科を立て、一に首悔を聽し、迷いて反らざるものは、制に依りて必ず戮すべし。官長をして審らかに檢校し、必ず明洗せしめ、然る後に州に上らしめて、永く以て正と爲さん。若

し虚昧有らば、州縣咎を同じくせん。今戸口の多少、元嘉より減ぜざるに、板籍帳に關くるは、弊亦た以有り。孝建自り已來、勳に入る者衆きも、其の中 干戈を操り社稷を衛りし者、三分して殆ど一無し。勳簿の領する所にして、辭籍を詐注し、世要に浮遊し、官長の拘録する所に非ざるもの、復た少なからずと爲す。尋ぬるに物の私を懷くこと、世として有らざるなく、宋末の落紐、此の巧尤も多し。又た將位既に衆く、卹を擧げて祿と爲し、實潤甚だ微なるも、人ごとに數萬を領す。此くの如き二條にして、天下合役の身、已に其の太半に據れり。又た籍狀を改注し、詐りて仕流に入り、昔人の爲に役せられし者、今反つて人を役すること有り。又た生まれながら髪を長ぜずして、便ち謂いて道人と爲すもの、街を填め巷に溢れ、是れ處として皆な然り。或いは子を抱えて并居せるに、竟に戸に編せられず。遷徙去來して、公けに土斷に違う。役に屬して滿つる無きに、流亡して歸らず。寧喪すること終身。疾病にて長臥す。法令必ず行なわるれば、自然競いて反らん。又た四鎮の戍將、名有るも實寡なく、隨才(16)部曲、勇懦を辨ずる無く、署位借給し、巫嫗も比肩し、山に彌ち海に滿ち、皆な是れ私役なり。貨を行し位を求むるは、其の塗甚だ易く、募役は卑劇なれば何すれぞ投補せんや。坊吏の盡くる所以、百里の單くる所以なり。今但だ募制をして明信ならしめ、滿復期有りて、民 逕路無ければ、則ち坊 表を立てて盈たすべきなり。治を爲すに制無きを患えず、患い行なわれざるに在り。行なわれざるを患えず、患い久しからざるに在り。

戸籍記載の不正の摘發については、縣にあつめられた戸籍をまったく審査せずに州に送るのみで、州の審査で不正が判明すれば本縣にさしもどすという舊來の戸籍作製手續(17)きに原因のあることを指摘し、縣で審査した後には州に送るようにし、もし摘發もれがあれば、州縣雙方に責任を負わせるようにすべし、という意見を述べている。一方、「臺坊」の役の應募者不足については、服役期限等の規則を明確にし、民に軍蔭（軍功による特權）等の容易な免役のみちがなければ、應募者不足は解決するというのみである。戸籍検査が徹底しさえすれば、軍蔭の不正取得者は摘發され、容易な免役のみちがなくなり、一般の力役よりは待遇のよい「臺坊」の役の應募者が増加するという意味であろう。戸籍記載の不正も「臺坊」



の役の不足も、根本的にはひとつの問題としてとらえられているのである。この虞玩之上表文の中で注目すべきは、縣の令長の責任において戸籍記載の不正問題を解決する方針を打ち出した點であらう。

虞玩之上表をうけた高帝は、「校籍官を置き、令史を置き、限りて人ごとに一日數巧を得さしめ、以て懈怠を防ぐ。」

とあるように、中央政府に専門の戸籍検査官を置き、その令史一人に一日數件の不正摘發を義務づけるという對策を採用した。その結果「貨賂因縁し、籍注正しと雖も、猶お強いて推却し、以て程限を充たす。」とあって、事態はさらに惡化した。<sup>(19)</sup>『南史』卷四七虞玩之傳は、以上を簡略化した記事を載せた後に、唐寓之の亂の記事を載せており、この戸籍検査

強化の結果が亂であつたことを強調する書き方をとっているが、『南齊書』本傳は、亂については一切ふれず、前章でみた如く、亂の發生した吳郡の長官であつた沈文季の傳に亂の詳細な記事を載せている。『南史』卷三七沈文季傳が亂に一切ふれていないのとまったく對照的な敘述となっているのである。戸籍検査に對する不滿が亂の背景にあるという點では、『南齊書』も『南史』も一致するが、虞玩之上表と亂とのつながりを強調するかしんかという點において、兩書の間には相違がある。この點、『南史』卷七七恩倖・茹法亮傳をみると、いっそう明確になる。

會稽の呂文度・臨海の呂文顯と並びに姦佞を以て武帝に諂事す。文度 外監と爲り、兵權を專制し、領軍將軍 虛位を守るのみ。…文度 既に委用せられ、大いに財賄を納め、廣く宅宇を開き、盛んに土山を起こし、奇禽怪樹、皆な其の中に聚め、後房羅綺、王侯も及ぶ能わず。又た籍を上りて却せらるる者は悉く遠戍に充てんことを啓し、百姓嗟怨し、或いは逃亡して咎を避く。富陽の人唐寓之 此れに因りて黨を聚めて亂を爲し、鼓行して東し、乃ち錢唐縣に於いて僭號し、新城戍を以て僞宮と爲し、錢唐縣を以て僞太子宮と爲し、百官を置きて皆な備わる。三吳の却籍せらるる者 之れに奔り、衆三萬に至る。吳國を竊稱し、僞年號 興平たり。其の源は虞玩之に始まり、文度に成る。事は虞玩之傳に見ゆ。

とあって、武帝政權下で戸籍検査を推進したのは、恩倖の呂文度であつたが、その政策は高帝の時の虞玩之の上表によつ

て始まったのだ、とされている。『南史』は、戸籍検査に對する不滿が亂をよびおこしたという事實から、その政策の提案者である虞玩之に着目したのであらう。だが、『南齊書』虞玩之傳によれば、虞玩之はたしかに戸籍検査推進の方策について論じているが、その方策は縣の令長の責任において検査を行なうというものであって、實際に施行され、しかも問題を悪化させた、中央政府における校籍官設置とは根本的に異なっている。高帝によって着手された戸籍検査を、不正を摘發された者に對する嚴罰をもって、より強力に推進した呂文度の施策と、虞玩之の提案した對策との間には相當の距離があるといわねばならない。<sup>(20)</sup> 虞玩之の上表を亂の遠因と明記する『南史』の記載は、全面的には受け入れられないが、武帝政權下で戸籍検査を推進したのが恩倖の呂文度であるという記述は、『南齊書』にはみられない有用な記述と考える。<sup>(21)</sup> それでは、虞玩之の上表と唐寓之の亂との因果關係を明記しない『南齊書』では、亂の原因をどのようにとらえているのだろうか。卷二二豫章文獻王傳には、唐寓之の亂の際の武帝の弟、蕭嶷の次のような啓をのせる。

此の段の小寇、兇愚に出で、天網宏く罩えば、理として論ずるに足らず。但だ聖明の世を御するときには、幸いに爾らざるべし。比る聲聽に藉るに、皆な由有りて然りと云う。豈に所懷を仰啓し、少しく心款を陳べざるを得んや。

山海崇深なれば、臣 安樂を保つを獲、公私の情願、此に於いて見るべし。齊 天下を有して、歲月未だ久しからず。萬民を澤沾すること、其の實未だ多からず。百姓猶お險にして、惡を懷く者衆し。陛下曲さに流愛を垂れ、毎に優旨を存す。但だ頃ろ小大士庶、毎に小利を以て奉公し、損する所の者の大なるを顧みず、籍を隨して工巧を検し、卹を督して小塘をも簡し、<sup>(22)</sup> 藏丁匿口、凡そ諸々の條制、實に怨府を長す。此れ目前の交利、天下の大計に非ず。一室の中すら、尙お精すべからず、寓宙の中、何ぞ周洗すべけんや。公家何ぞ嘗て民の欺巧多きを知らざらんや。古今政は細碎すべからざるを以て、故に此れを爲さず、實に理に乖るに非ず。但だ理を識る者百に一も有らず、陛下の弟兄大臣すら、猶お皆なは理に伏す能わず。況んや復た天下の悠々たる萬品においてをや。怨積み黨を聚め、兇迷相い類すること、一處に止まれば、何ぞ除かざるに足りんや。脱し復た所多ければ、便ち紆々を成さん。：

ここでは、齊王朝創立以來日も浅く、なお民力の休養が必要であるのに、「小利を以て奉公する」「小大士庶」が、戸籍検査や卹の督促等、目前の小さな利益を追求する政策を推進し、そのことが民衆の不滿をよびおこして唐寓之の亂に發展した、という認識を示し、「天下の大計」たる民力休養のためには、戸籍記載の少々の不正は大目にみるべきことを主張している。越智重明氏が指摘するように、「唐寓之の亂は通常檢籍が嚴格であつたため起つたとされているが」、卹の取り立てなど、「錢納の苛酷さ」が「民間の反抗をひきおこ」したという側面を重視すべきであろう。劉宋王朝末期以來の財政赤字克服のため、武帝政權では、戸籍検査の強化に限らず、卹をはじめ貨幣收入の増大のための施策を次々と實行していたのであり、そのような財政政策全般に對する不滿が亂の背景にあつたとみるべきなのであり、この點に關する蕭疑の認識は正確であると考ええる。蕭疑が言及した卹の實態は、越智氏が指摘するように、『南齊書』卷二六王敬則傳にみえる。

尋いで遷りて使持節・散騎常侍・都督會稽東陽新安臨海永嘉五郡軍事・鎮東將軍・會稽太守と爲る。永明二年、鼓吹一部を給せらる。會土 湖海を邊帶し、民丁 土庶となく皆な塘役を保す。敬則 以えらく、功力餘り有れば、悉く評斂して錢と爲し、臺庫に送り、以て便宜と爲さん、と。上 之れを許す。

とあり、唐寓之の亂直前の、永明二年頃、會稽太守王敬則が塘役のかわりに錢を徵收して中央の財庫（臺庫）に送納することを提案して、武帝の裁可を得た。これに對して武帝の子、蕭子良が次のような啓をたてまつって、反對意見を述べている。

…頃る錢貴く物賤く、殆んど兼倍せんと欲し、凡そ觸類に在りて、茲くの如くならざる莫し。稼穡難勦なるに、斛ごとに直數十、機杼勤苦なるに、匹ごとに裁かに三百。然る所以の者、實に亦た由有り。年常歲調、既に定期有りて、僅卹上る所、咸く是れ見直。東閭 錢剪鑿多く、復た完き者鮮なきに、公家受くる所、必らず員大を須むれば、兩を以て一に代え、貿うる所に困しみ、鞭捶質繫せられ、益々無聊を致す。

臣昔會稽を忝くし、粗ぼ物俗に閑いたるに、塘丁の上る所は、本と官に入らず。良に陂湖宜しく壅ぐべく、橋路須からく通すべきに由り、夫を均しくし直を訂り、民自ら用を爲せるなり。若し甲分毀壞せば、則ち年に一たび脩改し、若し乙限堅完なれば、則ち終歳役無し。今郡通じて此の直を課し、悉く以て臺に還せば、租賦の外、更に一調を生ぜん。塘路をして崩蕪し、湖源をして泄散せしむるを致し、民を害し政を損うこと、實に此れ劇と爲す。

建元初、狡虜游魂し、軍用殷廣たり。浙東五郡、丁ごとに一千を税し、乃ち妻兒を質賣し、以て此の限に充つるもの有りて、道路愁窮、聞見するべからざりき。逋する所尙お多く、收上の事絶えたれば、臣登ちに具さに啓聞し、卽ち鑄原を蒙れり。而れども此の年の租課、三分して一を逋し、明らかに徒だ民を擾がすに足るのみにして、實自に國を弊せしむるを知る。愚謂えらく塘丁の一條、宜しく還た舊に復すべく、在所の逋卹は、優量原除すべし、と。凡そ應に受くべきの錢は、大小を限らず、仍りて在所をして布帛に折市せしめん。若し民雜物有りて、是れ軍國の須むる所なれば、價に隨ひ直に准ぜしむるを聽し、一應に錢を送るを必せざるも、公に於いて其の用を虧かず、私に在りて實に其の渥きを荷なわん。：

民を救い弊を拯うには、賦を減ずるに過ぐる莫し。時和し歳稔れども、尙お爾く虚乏したれば、儻し水旱に値たれば、寧ぞ熟念すべけんや。且つ西京の熾強なりしは、實に三輔に基づき、東都の全固なりしは、寔に三河に賴り、歷代同じき所、古今一揆なり。石頭以外、裁かに自ら府州に供するに足り、方山以東、深く朝廷の根本に關わる。夫れ股肱要重にして、卹まざるべからず。宜しく寛政を蒙り、少しく優養を加えらるべし。其の目前の小利を略し、其の長久の大益を取らば、民質の殷かならず、國財の阜かならざるを患うこと無きなり。宗臣重寄、威な國を利すると云うも、竊かに愚管の如くんば、未だ安んずべきを見ず。

蕭子良は、塘役の代りに錢を取り立てる政策をはじめ、永明二年頃の財政政策全般への批判を展開している。越智氏の指摘のとおり、さきの蕭嶷の啓ではこの錢のことを卹と稱しているのである。卹とは、元來、幹僮（官人に給される役吏）の

役の代りに納入する錢のことであつて、蕭子良の啓の中では「僮卹」<sup>(24)</sup>という名稱で出ている。蕭子良は、塘丁の役の代りの卹や「僮卹」の取り立てをはじめとする政府の良貨吸いあげの政策が三吳地方の農民を困窮におとしつけている現状を批判し、塘丁の役は、舊來の水利施設の管理方式、すなわち「勞役を提供して補修するか、あるいは塘役を錢納して勞役をやめるかというかたちで」の「住民全體の主體的參加による水利施設の直接管理」<sup>(25)</sup>にもどすべきことを主張している。この主張の根底の論理が民力の休養であることは、「民を救い弊を拯うには、賦を減するに過ぐる莫し。」以下の最後の段落をみれば明瞭であり、さきにみた蕭嶷と共通の志向をうかがうことができる。しかし、この蕭子良の主張は、武帝には受け入れられなかった。

以上、南齊・武帝政權によって推進された戸籍検査や卹の取り立て等の財政政策をめぐって、蕭嶷・蕭子良ら民力休養の主張が提起されていたことが判明する。これら民力休養派に對立したのは、呂文度ら恩倖寒人、さらに積極的に良貨吸い上げを提案して武帝政權に迎合する王敬則ら一部官僚で、恩倖寒人はもとより、王敬則も女巫の子で軍人として出世した『南齊書』本傳）非士大夫なのであった。兩者の相違は、唐寓之の亂への對應にも現われている。蕭嶷は、先にみたように、唐寓之の亂の發生を眞摯にうけとめて政策の轉換を主張したが、これに對する武帝の回答は次のようなものであった（『南齊書』豫章文獻王傳）。

欺巧 那ぞ容すべけんや。宋世混亂せるは、以て是と爲すやいなや。蚊蟻何ぞ憂いと爲すに足りんや。已に義勇の破る所と爲り、官軍も昨う至りたれば、今都て應に散滅すべし。吾れ政に其の大を辨ぜざりしを恨むのみ。亦た何れの時にか亡命無からんや。

ここには、反亂、さらには戸籍のごまかしに對してあくまで強硬な武帝の姿勢がみられるが、この發言の後に、後乃ち詔して籍注を復するを許す。

とみえ、「却籍」の一定の緩和が行なわれたことを示している。この緩和は、戸籍のごまかしの一掃が不可能であること

を政府自らが認めざるをえなくなったことを示すものではあるにしても、これを以て根本的な政策轉換、すなわち民力休養論の勝利とみなすことはできない。<sup>(26)</sup>武帝政權による財政政策と民力休養論とが、唐寓之の亂の後にも對峙し續けていることは、『南齊書』卷四六陸慧曉傳附顧憲之傳に明瞭である。本傳には、まず顧憲之の論が提出されるに至った事情が次のように述べられる。

永明六年、隨王の東中郎長史・行會稽郡事と爲る。時に西陵戍主杜元懿啓していわく、「吳興秋り無く、會稽豐登し、商旅の往來、常歲より倍多せり。西陵の牛犂税、官格は日ごとに三千五百なれど、元懿如し見る所に即かば、日ごとに一倍すべく、盈縮相い兼ねれば、略計年ごとに百萬を長ぜん。浦陽の南北津及び柳浦と四埭、乞うらくは官の爲に領攝し、一年にて格外に四百許萬を長ぜん。西陵戍前の檢税は、戍の事を妨ぐる無く、餘の三埭は自ら腹心を擧げん。」と。世祖敕して會稽郡に示していう。「此れ詎ぞ是れ事宜ならんや。<sup>(27)</sup>訪察して即ちに啓すべし。」と。

永明六年、西陵戍主杜元懿が、凶作の吳興<sup>(28)</sup>と豐作の會稽との間の商人の往來の激増に着目して、西陵等、四つの牛犂の通行税を自分に請負させたなら、四百萬錢の税收増加を達成する旨、提案したのに對し、武帝は、都合のよいこと（「事宜」「便宜」）ではないかと考え、當時、隨郡王子隆<sup>(29)</sup>のもとで東中郎長史・行會稽郡事として、會稽郡の長官を代行する立場にあった顧憲之に調査と報告を命じた。これに答えて、顧憲之が「議」をたてまつったのであるが、その前半で、次のようにいう。

始め牛犂を立つるの意を尋ぬるに、苟も逼り愆して以て税を納めしめんとせしには非ざるなり。當に風濤迅險、人力捷たず、屢々膠溺を致せしを以て、急を濟い物を利すべきなればのみ。既に公私是れ樂しみ、所以に直を輸むれど怨む無し。京師の航渡、即ち其の例なり。而るに後の監領する者、其の本に達せず、各々己が功に務め、互いに理外を生ぜり。或いは別道を禁遏し、或いは空しく江行に税し、或いは船を撲くして價を倍にし、或いは力周ねくして猶お責め、凡そ此くの如き類、犂を經牛を煩わさざる者上詳し、格外十條を報ぜられ、並びに停寢せらる。從來の誼

訴、始めて暫らく弭むを得たり。案ずるに吳興は頻歲失稔し、今茲に尤も饑え、之れを去りて豊に従うは、良に饑棘せるに由る。或いは貨を徴して粒に質え、還りて親累を拯い、或いは老弱を提攜し、陳力餬口せるに、隸司税を責め、格に依りて降さず。舊格新に減ずれども、尙お未だ登るを議さざるに、格外加倍、將た何の術を以てせんや。皇慈恤隱し振廩調せるに、元懿 災を幸いとし利を権め、重ねて困瘼を増さんとす。人にして仁ならざるもの、古今共に疾む。且つ比ろ格に加えて市を置く者、前後相い屬ぐも、惟だ新加贏たす無きのみに非ずして、並びに皆な舊格すら猶お闕く。愚恐るらくは、元懿の今の啓も、亦た當に殊ならざるべし、と。若し事 言に副わざれば、譴詰を貽すを懼れ、便ち百万侵苦し、公の爲めに怨みを買わん。元懿 稟性苛刻、已に往效に彰われ、任ずるに物土を以てするは、譬えば狼を以て羊を將いしむるときにして、其の擧げんと欲する所の腹心も、亦た當に虎にして冠すべきのみ。書に云わく、「其の聚斂の臣有らんよりは、寧しろ盜臣有れ。」と。此れ公より盜むは損を爲すこと蓋し微なれど、民より斂むるは害する所乃ち大なるを言うなり。今雍熙運に在り、草木澤いを含み、其の事宜に非ざること、仰ぎて聖旨の如し。<sup>(30)</sup>然らば斯の任を掌る者、應に廉平を簡ぶべし。廉なれば則ち公より竊まず、平なれば則ち民に害無きなり。愚又た以えらく便宜とは、蓋し公に便にして、民に宜しきを謂うなり。竊かに見るに頃ろの便宜を言う者、能く民力の外に於いて、天を用い地を分くる者に非ざるなり。率むね皆な即日民に宜しからざれば、方來公に便ならず。名と實と反し、政體に乖ること有り。凡そ此くの如き等、誠に宜しく深察すべし。

牛隸とはそもそも交通の便のために設置されたものであり増税の手段ではないこと、吳興の凶作に乗じて増税をはかるのは人道に反すること、從來より多額の納税を約定して通行税等の商税を請負う者が續出していたが、その達成は困難であり、結局民衆にしわ寄せがいくのが現状であること、等の理由を述べ、『大學』の一節を引用して杜元懿を「聚斂の臣」と極め付け<sup>(31)</sup>、杜元懿の提案は決して本來の意味での「便宜」ではなく、民力を疲弊させる以外の何物でもないことを論じる。願憲之は、さらに次のようにいう。

山陰一縣、課戸二萬、其の民の貲三千に満たざる者、殆ど將に半ばに居らんとし、刻し又た之れを刻して、猶お且つ三分して一を餘せり。凡そ貲有る者は、多く是れ士人にして復除せられ、其の負極まれる者は、悉く皆な露戸の役民。三五官に屬せば、<sup>(32)</sup>蓋し惟れ分定まりて、百端の輪調、又た則ち常に然り。比ろ衆局の檢校、首尾尋續し、横しまに相い質累せらるる者も、亦た復た少なからず。一人攝せらるれば、十人相い迫い、一緒裁かに萌さば、千葉互いに起こる。蠶事弛みて農業廢れ、賤く庸を取りて貴く貲を擧げ、公に應じ私を贍らわし、日々暇給せざれば、非を爲すこと無からんと欲すれども、其れ得べけんや。死すら且つ憚らず、矧んや伊れ刑罰をや。身すら且つ愛せず、何ぞ沉んや妻子をや。是を以て前檢未だ窮せざるに、後巧復た滋く、網辟徒らに峻しきも、猶お憐る能わず。竊かに尋ぬるに民の偽多きは、實に宋季軍旅繁興し、役賦殷重なるに由り、勤劇に堪えず、巧に倚りて優を祈め、習を積みて常を生じ、遂に迷いて反るを忘るるなり。四海の大、黎庶の衆、心用參差にして、卒かには澄一し難し。化するには宜しく漸を以てすべく、疾責すべからず、誠に擾さざるを存し、疾を藏し汗を納れ、實に崇曠を増し、務めて寛簡を詳らかにすれば、則ち稍自やく淳に歸さん。又た符簡を被るは、前後年月久遠にして、具事存せざるを病み、符旨既に嚴なれども、敢えて闇信せず。縣簡して郡に送り、郡簡して使に呈せば、殊形詭狀、千變萬源。聞く者は忽せにして經懷せざれども、見る者は實に傷駭するに足る。兼ねて親屬里伍、道路に流離し、時轉た寒涸なれど、事方に未だ已まず、其の士人・婦女は、彌々衷を厝き難し。簡せざれば則ち其の巧有るを疑い、簡せんと欲すれば復た未だ安んずる所を知らず。愚謂えらく此の條、宜しく縣に委ねて簡保せしむべし。其の綱領を擧げて、其の毛目を略さば、乃ち囊漏るれども、貯中を出さず、嬰疾沈痼なる者、重ねて生造の恩を荷なうに庶からん。

會稽郡の首縣山陰縣の役を負擔する戸の悲惨な狀況を述べて、戸籍記載のごまかし(「巧」)もやむをえない事情によるものがあること、戸籍檢査が縣、郡、(臺)使といくつもの段階をふんで行なわれる(「衆局の檢校」)點に新たな不正を生む原因のあること、を指摘し、戸籍檢査は縣に一任して、細部にわたる檢査は省略することを提案している。この戸籍檢査



を縣で行なうという提案は、虞玩之の意見と同じである。この戸籍検査を縣の責任において實施するという點こそ、恩倖寒人によって推進された臺使の派遣による郡・縣への厳しい締め付けへの對案なのである。なお、この顧憲之の論によれば、當時の會稽郡における戸籍検査は、縣から郡へと引き繼がれ、郡の段階で臺使が介在して監査を行なっていたことがうかがわれる。顧憲之はさらに次のように述べて、論を結ぶ。<sup>(33)</sup>

又た永興・諸暨 唐寓之の寇擾に離り、公私殘盡、彌々復た特に甚だし。儻し水旱に値たらば、實に念い易からず。

俗諺に云わく、「會稽 鼓を打ちて卹を送り、吳興 令史に歩擔す<sup>(34)</sup>。」と。會稽舊と沃壤と稱せられしに、今猶お此くの如し。吳興 本とより是れ瘠土なれば、事知るべきに在り。因循の餘弊、誠に宜しく改張すべし。元懿の今の啓に沿い、敢えて管見を陳ぶ。

會稽郡管内の永興・諸暨兩縣が唐寓之の亂の被害を受けており、このうえ天災にあったなら、想像もつかないほどの慘事を招くおそれがあることを述べ、さらに、舊來豊かな土地であるとされてきた會稽郡でさえ、このような状況であるのに、貧しい吳興郡は困窮はいっそうひどい状況にあることを訴えて、政策の見直し―民力休養への方針轉換を迫っているのである。

以上、物資の流通の激増という状況に對應して、牛隸通行税を舊來の二倍の額で請け負うことを希望した西陵戍主杜元懿を直接の標的としつつ、武帝政權の財政政策全般が批判の對象とされている。杜元懿の提案にみえる會稽から吳興への物資の流通激増は、吳興郡の凶作という特殊な状況におけるものだが、「比ろ格に加えて市を置く者、前後相い屬ぐ<sup>(35)</sup>」といわれていることを考えると、長江下流の三吳地方で一般的に物資流通が活況を呈している中で、さらに顯著な現象とみてよいであろう。武帝政權は、戸籍検査に加えて、このような物資流通の活況に即應して、そこからより多くの税收を確保する政策を展開したが、この政策の遂行には、杜元懿のように流通の實情を現場で把握している者が必要だったのである。これに對して、顧憲之は、民力休養の立場から反對の論陣を張り、唐寓之の亂もひきあいにして、方針轉換

を迫っている。この顧憲之の論は、先にみた蕭子良の論と同様、現状に對する深い洞察力を示すものである。<sup>(36)</sup>

みてきたように、唐寓之の亂後も、武帝政權の財政政策對民力休養論という圖式には變化はみられない。武帝政權の財政政策が恩倖寒人を主たる擔い手とするのに對し、民力休養論の擔い手は、皇族内の良識派ともいべき蕭嶷・蕭子良を筆頭に、顧憲之（吳郡・吳の人）ら南北の名門出身者を含む士大夫であった。<sup>(37)</sup> このことからいえば、永明年間の政治史を恩倖寒人對士大夫という圖式のもとに描寫するのが、蕭子顯『南齊書』の立場であった、ということができよう。章を改め、この『南齊書』の立場について、考察を進める。

### 三 蕭子顯『南齊書』の立場

『南齊書』の撰者、蕭子顯（四八七—五三七）<sup>(38)</sup>は父蕭嶷のために傳を立て、「其の父を表彰し」たことで知られる。<sup>(39)</sup> それだけに、蕭嶷らの主張する民力休養論は、そのまま蕭子顯自身の立場をも示すと考えられる點をまず確認しておく。齊梁革命後、梁王朝に仕えることとなった蕭子顯は、『南齊書』に、蕭嶷・蕭子良らの議論を詳述することによって、徳を失つて滅亡した南齊王朝にも、良識派の存在したことを訴えようとしたのであろう。

蕭子顯が『南齊書』を執筆した動機としては、父ひいては南齊王朝の顯彰ということが考えられるが、蕭子顯の歴史敘述に大きく影響を与えたのは沈約『宋書』である。<sup>(40)</sup> 『宋書』卷九四恩倖傳序文における劉宋後半の恩倖政治にたいする鋭利な批判は、そのまま永明時代の政治批判ともなりうるものであったが、その骨子は、『南齊書』卷五六倖臣傳「史臣曰」の條に繼承されている。また、『宋書』卷九二良吏傳序文・同傳「史臣曰」の條・卷六五吉翰等傳「史臣曰」の條<sup>(41)</sup>は、劉宋後半の地方長官の任期短縮と中央政府による地方政治への過度の干渉とが厳しく批判されている。この沈約の主張は、『南齊書』卷四〇武十七王・竟陵文宣王子良傳の、

宋の世、元嘉中、皆な郡縣に責成せるに、孝武 徵求急速、郡縣遲緩せるを以て、始めて臺使を遣わし、此れ自り公

## 役勞擾す。

という敘述と完全に軌を一にしている。すなわち、劉宋の文帝の元嘉年間以前には、郡縣の長官に委任されていた地方政治が、孝武帝治世以降、徴税の強化のために中央より臺使を派遣するようになり、この臺使派遣にともなっておびたしい力役が徴發されるようになったのである。上の記事に續けて、南齊王朝創業時の蕭子良の臺使の弊害批判が引用されている。前章でみた虞玩之や顧憲之の、戸籍検査を縣令の責任において實行せよ、という主張も、臺使批判と同様の志向をもつ議論であろう。さらにいえば、沈文季傳の唐寓之の反亂に関する記述も、縣令の處分に關する記録なのであり、確固とした權限を與えられていない縣令が反亂に際して厳しい處罰を受けることの不當性を暗に訴えているようにも推測される。少なくとも、縣令の權限と責任に對する深い關心に基づいた敘述であることは疑いなくであろう。

沈約『宋書』の本紀・列傳が執筆されたのは、永明五年から六年にかけてであり、『宋書』の史論の主張は、永明年間の士大夫の思潮を色濃く反映するものであった。沈約が蕭子良の八友の一人であったことは、よく知られた事實である。<sup>(42)</sup>

さらに、沈約が建武年間（四九四～四九八）、蕭子顯の兄子恪の要請を受けて蕭疑の碑文を撰している（『南齊書』卷二二 豫章文獻王傳）ことは、蕭子顯兄弟と沈約との密接な關係を示すものであろう。<sup>(43)</sup>『南齊書』における士大夫の立場での歴史敘述は、沈約の影響を考慮にいれねばならないのである。

『南齊書』が編纂された年代はよくわからないが、梁の武帝の天監年間（五〇二～五一九）後期から普通七年（五二六）までの間であろうと考えられている。<sup>(44)</sup>川勝義雄氏の指摘のように、梁の武帝、蕭衍も蕭子良の八友の一人であり、「即位して以後、流民安插、租調減免、農事保護などに關する敕令をたびたび出していることは、五銖錢という良貨を發行した」と相俟って、かつて蕭子良が鋭く分析した「慢性的な農村の不況」「に對する相當な考慮を示」していた。<sup>(45)</sup>このような蕭衍の政治姿勢も『南齊書』の敘述に反映されていることは間違いないであろう。ただ、『南齊書』の撰述された時期については、武帝が政治に情熱を失い、信仰の世界へ深くふみ込んでいった時期であるという榎本あゆみ氏の指摘のと

おり、蕭衍の政治姿勢が微妙に變化してくる時期なのだが、このことと『南齊書』との關係―たとえば『南齊書』がかかる變化を認識して書かれたか否かなどの點についてはよくわからない。

以上のごとく『南齊書』の敘述は、沈約『宋書』の敘述や梁の武帝の政治姿勢に強く影響されて、士大夫の立場によるものであった。この士大夫に對置されるのは、恩倖寒人であるが、恩倖寒人が武帝政權において果たした役割について、『南齊書』はあまり觸れていない。『南齊書』が永明時代政治史を恩倖寒人對士大夫という圖式のもとに描寫しようとしているのは確かなのだが、一方の當事者である恩倖寒人についての記述は、『南史』の方が詳しいのである。たとえば、先にみたように、蕭子良らの戸籍検査に對する批判は詳細に引用されても、その戸籍検査を推進したのが誰かについては明記せず、『南史』卷七七恩倖・茹法亮傳の記述から呂文度ら恩倖寒人であることがわかる。また、同卷の呂文顯傳には、

時に中書舍人四人各々一省に住み、世之れを四戸と謂う。既に重權を總べ、勢天下を傾く。…其の後玄象度を失し、史官宜しく祈禳の禮を修むべしと奏す。王儉之れを聞き、上に謂いて曰く、「天文乖忤し、此の禍は四戸に由る。」と。仍りて文顯等專擅にして和に愆えるを奏し、其の事を極言す。上之れを納るると雖も改むる能わざるなり。と、永明年間、恩倖寒人が中書舍人となって實權を掌握し、超一流の名門出身の宰相(47)（尚書令）王儉と對立關係にあったことが明瞭に述べられている。さらに、同卷劉係宗傳に、

武帝常に云う。「學士輩經國に堪えず、唯だ大いに讀書するのみ。經國は、一劉係宗にて足れり。沈約・王融數百人、事に於いて何ぞ用いんや。」其の吏事を重んずること此くの如し。

とあるのも、沈約・王融ら士大夫と恩倖寒人との對抗關係を明示する記述である。これについては、『南齊書』卷五六倖臣・劉係宗傳にも類似的の記述があるものの、武帝が明帝になっているほか、沈約・王融の姓名を記さず「此の輩」と「學士」一般を指すことばにおきかえられている。まず、劉係宗は武帝の時代に活躍した人閒であるから、『南史』の記載の

方が正しいと考えられる。次に、沈約・王融の姓名をあげていない点については、周一良氏が、

蓋し蕭子顯 貴族文人なれば、貴族文人沈約の形象を維護し、寒門劉係宗の掩う所と爲るに至らざらしめんが爲め、  
此れに因りて此の輩の二字を用って具體姓名に代替せるのみ。

(48)と論ぜられたごとく、沈約ら士大夫を擁護する蕭子顯の立場による書き替えであろう。士大夫と恩倖寒人との對抗關係において永明時代を描くわりに、一方の當事者たる恩倖寒人の記述が手薄で、士大夫側の主張が長々と引用されるという『南齊書』の敘述の特質は、士大夫の立場にたつ蕭子顯の主観がはいりすぎているためなのである。しかし、この點は南齊王朝當事者である蕭子顯による歴史敘述の宿命であり、やむをえないことである。『南齊書』の視點がこのようである以上、『南齊書』のえがく士大夫對恩倖寒人という圖式も、すべてをそのまま事實として受け取るわけにはゆかないであろう。

それでは、永明時代政治史の實像はどのようにとらえたらよいのだろうか。『南齊書』豫章文獻王傳を手がかりに、考察してみる。本傳は、蕭子顯が父蕭嶷を顯彰するために、良いことしか書いていないと、とりわけ非難をあびてきた傳である。本傳が基本的に、蕭嶷を有徳者と描こうとしているのは事實だが、「七千餘字」に及ぶ詳細な記述がすべて經歷と美辭麗句のみで盡くされているわけでもない。蕭嶷と武帝との書簡の往復を詳細に採録しているため、かえって永明時代の宮廷周邊の事情を示す記述がみられる。このうち、自らも含めた諸王の率いる儀仗兵の適正な人數についてうかがいをたてた蕭嶷の書簡に對し、武帝は禮制に詳しい王儉らと相談するよう回答した。かさねて武帝の意向を尋ねた蕭嶷の書簡の中には、「又た王儉に因りて備さに下情を宣べたり。」と、書簡以外にも王儉を介して自分の意向を武帝に傳達していることがみえ、これに對する武帝の返事には、「儉 已に道いて、吾れ即ちに答えしめたれば、此の啓有るを煩わさず。」と、王儉を介しての質問のうえに、わざわざ書簡でまで問い合せることは無用であると回答している。また、武帝が蕭順之（蕭衍の父）の邸宅に行幸した際、武帝に隨行した蕭嶷の車が武帝の行列に突っ込んだ事件をきっかけに兄弟の

對立が兆すことを懸念した書簡には、「比ろ閑侍に次無ければ、略ぼ茹亮に附して口宣せしむ。」とあり、これに對する武帝の返書に、「茹亮 今汝の懷う所を啓し、及び別紙を見たり。汝の勞疾も亦た那んぞ動ぜざるを得んや。何の意ありて煩長の啓事を作るを爲さんや。」と、茹亮を介しての傳達で十分であると回答している。

以上、詳細は省略したが、蕭嶷が武帝に對しておうかがいをたてた書簡には、自分が新築した建物が贅澤すぎるのでとりこわすべきかなど、日常生活にわたる細かい事柄も含まれており、蕭嶷が武帝に對しうかに謙虚に仕えていたかを示している。蕭嶷のおうかがいは、書簡のほか、王儉や茹亮を介しても武帝に傳達された。茹亮とは恩倖寒人茹法亮のことである。<sup>(50)</sup>武帝と蕭嶷との間に緊密な意志疎通が行なわれ、その間に名門王儉や恩倖寒人茹法亮が介在する。南齊・武帝政權の意志決定は、<sup>(51)</sup>このような皇族・名門・恩倖寒人からなる武帝周邊の限られた集團の中で行なわれていた、と考えた方が實情に近いのではなからうか。

とはいえ、蕭子良・顧憲之らの民政の實情に對する分析には非常に鋭利なものがあり、武帝政權の政策の問題點を正確に指摘するものであったことも否定できず、『南齊書』の描き出す恩倖寒人對士大夫という圖式のすべてが虚構であったとはいえない。そのような對抗の局面はたしかに實在したのである。蕭子良らの主張は、民力休養の主張の正當性という點からばかりでなく、臺使による監督に反發する名門出身の實務にうとい地方長官たちの意向にも沿うものでもあった。そのことは、蕭子良が臺使の弊害を論じた中に、

凡そ衣冠に預かり、恩を盛世に荷なえるものは、閭閻を以て讐を貽すこと多きも、欺猾の爲に罪に入るもの少なし。とあることによつてうかがわれ、その主張の正當性のみならず、名門出身官僚の保守的傾向にも支えられて、武帝政權の政策に對して一定の抑止力を發揮したことであらう。顧憲之の議論がいれられたことにも、それは示されているのではない。『南齊書』は特殊な對抗の局面を強調することによつて、恩倖寒人對士大夫という圖式をうかがひあがらせてい

る。唐寓之の亂に對する武帝と蕭嶷らとの見解の相違もこのような對立の圖式の一環として描かれているのである。

## おわりに

南齊・武帝政權のもと、劉宋末に破綻していた財政の再建にむけて、戸籍検査の強化とともに、物資流通の増加に對應した錢貨すいあげの政策が展開された。できるだけ多くの戸口を戸籍に登録しようとする努力は、水上労働者や商人等にも及んだかもしれないが、これらの非農業民を把握するのは困難であつたにちがいない。だが、もうひとつの物資流通への課税は、確實に非農業民の生活をも壓迫したはずであつて、唐寓之の亂の中核を構成した水上労働者や商人が反亂にはつた重要な原因であつたと考えられる。もちろん、あまりに苛酷な戸籍検査に不満をもつ農民や新興豪族層の便乗もあつたであらう。この反亂は、當初四百人というごく少數の集團にすぎなかったが、浙江西岸の諸縣では鎮壓できず、吳・會稽兩郡も鎮壓にてこずるうちに、三萬人規模に擴大し、中央の近衛部隊の出勤によつて鎮壓された。中央軍出勤後は短期間に鎮壓されたが、地方長官を輩出する士大夫たちには衝撃だつたにちがいない。蕭子良ら士大夫と武帝政權とでは、亂をどのようにうけとめるかにおいても顯著な認識の相違を示した。およそ以上が、『南齊書』から知られる唐寓之の亂である。反亂の中核を構成した水上労働者や商人の實態は不明である。首謀者の唐寓之は、社會の底邊と接する、ごく下層の知識人（風水先生）というべきだが、彼の主張なり構想なりがどのようなものであつたかもわからないのである。

## 註

- (1) 『南齊書』卷五六倖臣・劉係宗傳に、「白賊唐寓之」とみえる。

- (2) 唐寓之の亂は農民起義ではないという説は、はやく范文瀾『中國通史』（人民出版社、一九七八年版、第二冊、四九七頁）にみえる。また、王仲犛『魏晉南北朝史』上冊（上海

人民出版社、一九七九）は、「白賊」と白籍とを結びつける點は頼家度説と同様だが、白籍を僑民の戸籍ととらえ、唐寓之の亂を僑民の反亂とみる（四三六頁）。獨自の見解であるが、「白賊」の理解は朱大渭説が妥當であらう。一方、韓國磐『魏晉南北朝史綱』（人民出版社、一九八三）は、反亂に

は庶族地主も参加したが、さらに多数の貧苦農民が参加していることを重視して、やはり農民起義ととらえるべきだと主張し（三八五～三八六頁）、劉精誠『兩晉南北朝史話』（中國青年出版社、一九九三）も農民起義として敘述している（一二五頁）。

なお、中國において使用される士族地主とは、ほぼわが國で使用される貴族に相當し、官界に勢力をもち免役等の特權を享受する地主のことであり、庶族地主とは、官界進出におくれをとった地方豪族や新興地主のことである。このような地主制を前提とした中國の士族制度研究については、中村圭爾『六朝貴族制研究』（風間書房、一九八七）二五～三〇頁を参照。

(3) 當時の士大夫については、谷川道雄『中國中世社會と共同體』（國書刊行會、一九七六）に、六朝貴族の「學問こそは、中國社會における道德的共同體世界の實現を目ざして營まれ集積されてきたものであるが、このような學問の現實社會への媒介者がつまり士大夫であり、當時においては貴族なのであった。」（一〇九頁）と指摘されているように、ほぼ貴族階層に屬する。村上哲見「文人・士大夫・讀書人」（『中國文人論』所收、汲古選書、一九九四）によれば、士大夫の要件は、「天下國家の經營に對する使命感」と「その使命をはたすために必要な知的洗練、もしくは人文的教養」（三五頁）なのであり、士大夫とは山田勝芳氏のいわゆる「非専門家的教養人」にはかならない（『中國古代の士人・庶人關係』、『中國社會における士人庶民關係の總合的研究』科研費

報告書、一九九一、七頁）。このような人文的教養の擔い手は六朝においては、主として貴族であり、實務に必要な法令や官廳文書に關する非士大夫的な知識は、新興豪族や商人などのいわゆる寒人を主たる擔い手とした。

(4) 唐虞之の亂關連の史料は、張澤咸・朱大渭編『魏晉南北朝農民戰爭史料彙編』（中華書局、一九八〇）上册に集められている（三九四～四〇二頁）。

(5) 關維民「六朝錢塘 治設柳浦——六朝錢塘縣聚落的地理分布」（『南北朝前古杭州』所收、浙江人民出版社、一九九二）三六三頁によって、抑を柳に改める。

(6) 浙江地區における風水とくに「相墓」の流行については、王志邦「六朝浙江東・西地區的墓葬」（『六朝江東史論』所收、中國青年出版社、一九八九）一四六頁参照。

(7) 新城縣・桐廬縣のいずれも浙江西岸に存在する。浙江西岸には、河口に錢塘縣があり、そこから上流へむかつて富陽、新城、桐廬の順に四縣が鄰接しており、いずれも吳郡の屬縣である。

(8) 亂の記事の末尾に、郡縣の長官の反亂への不適切な對處を彈劾した御史中丞徐孝嗣の上奏が引用されていることも、この推測を裏附けるであろう。

(9) 小岩井弘光「宋代錢塘江流域の交通について」（『東北大學東洋史論集』第一輯、一九八四）では、宋以後のこの地域の交通が陸路よりも水路の利用度が高かったことを論じておられるが、南朝においても同様と考えられよう。

(10) 宮崎市定『大唐帝國』（河出書房「世界の歴史」七、一九



六八)が、東晉末期の孫恩・盧循の反亂を、「水上勞働者の反亂」として敘述している(二八六—二八八頁)が、この點は、唐寓之の亂を考える際にも示唆的である。なお、川勝義雄「中國前期の異端運動」(『中國人の歴史意識』所收、平凡社選書、一九八六)も、「水上生活者」が「孫恩・盧循の大きな支持基盤であつた」ことを指摘しており(一六〇頁)、さらに、藤間生大「東晉時代の反亂」(『熊本商大論集』二七一—一九八〇)は「孫恩・盧循の反亂のねばり強い戦い」に注目して、「農業も一部ではやっていると看做し、漁業を営む漁師や、商船に關係する水夫の存在を考えなければならぬ。」(七三頁)と述べている。孫恩・盧循の亂や唐寓之の亂を考える場合、水夫や漁民等の非農業民の存在を無視できないことは確かであり、網野善彦『増補 無縁・公界・樂』(平凡社選書、一九八七)の「非農業民の中で、最も數多く、農業民に十分比肩しうるだけの役割を日本の歴史の中で果たしたことの間違いのない海民(漁民、鹽業民、水上運輸に携わった人々、等々)」(一九七頁)という指摘も非常に示唆に富む。

(11) 宮川尚志「南北朝の軍主・隊主・戍主等について」(『六朝史研究 政治・社會篇』一九五六所收)では、「新城戍を宮とし、新城縣解を太子宮とし」(五七八頁)と述べ、新城戍を新城縣と結びつけて考えられたが、『南史』卷七七恩倖・茹法亮傳では、「以新城戍爲僞宮、以錢唐縣爲僞太子宮」となっており、縣解は錢塘縣のものであることが明記される。關維民氏の考證によれば、この新城戍は、錢塘縣にあつた戍

の名稱なのであつて(註(5)所掲書三六四—三六五頁)、これによるべきであらう。

(12) 劉宋末、尙書右丞虞玩之が當時の財政危機について詳細な報告を行なっている(『宋書』卷九後廢帝紀、元徽四年五月乙未の條)。虞玩之は、當時すでに實權を掌握していた蕭道成から財務官僚としての手腕を期待されており、後述のように、南齊成立後、戶籍檢査にたずさわつた。拙稿「南朝財政機構の發展について」(『文化』四九—三・四、一九八六)五六、六四頁を参照。

(13) 池田溫『中國古代戶籍帳研究』(東京大學出版會、一九七九)二九—三二頁を参照。三狀について、池田氏は「父・祖・曾三代の資狀か」(三二頁)という見解を示し、本稿もこれによるが、諸説がある。宋昌斌『中國古代戶籍制度史稿』(三秦出版社、一九九一)は、池田説と同じであるが、周一良「虞玩之傳詔書及表文」(『魏晉南北朝史札記』中華書局、一九八五)には、「祖・父及び自身の記錄」という見解が示されている(二四六頁)。増村宏「黃白籍の新研究」(『東洋史研究』二一四、一九三七)は「父祖伯叔兄弟の資狀」とし(三三頁)、越智重明「魏晉南朝の貴族制」(研文出版、一九八二)も増村氏による(二九六頁)。中村圭爾「南朝戶籍に關する二問題」(『人文研究』四四—一二、一九九二)は、戶籍の記載事項について、「士族のばあいには祖・父・己の官職や任免年時、干支をふした詔書の引用、鄉論清議關係の記事もふくまれていた。」(九三頁)と述べ、周一良氏と同様の見解をとる。

(14) 註(13)所掲の中村氏論文、九一頁。

(15) 濱口重國「魏晉南朝の兵戸制度の研究」(『秦漢隋唐史の研究』上巻所収、東京大學出版會、一九六六)四〇九～四一〇頁を参照。濱口氏は「臺坊(都建康の各坊のこと)の諸吏役は以前から募集制となつて居り、宋の元嘉年間までは應募者が常に滿ち溢れる状態であつたが、大明年間から志願者が甚だ少く坊内の事務雜役に困るやうに成つた」と述べ、越智重明「魏晉南朝の貴族制」(註(13)も、臺坊について、「中央の各坊」と注記し(二九七頁)、濱口説による如くである。これに對し、周一良「虞玩之傳詔書及表文」(註(13)は、臺坊とは「皇帝禁軍羽林部隊」のことであると解して、「おそらく人は地方の軍隊に参加したがるということをいつていたのであり、地方の軍隊が戰爭で功を立てて、軍蔭を獲得しやすいので、羽林近衛軍で服役するのを願わない」のだという(二四七頁)。「宋書」卷九後廢帝紀、元徽四年五月乙未の條の尙書右丞虞玩之の上表にも「二衛臺坊人力、五不餘一。」とみえ、禁軍左右衛と臺坊との關連をうかがわせるので、左右衛の指揮のもと、中央の各官廳の警備等にたずさわつた吏役が「臺坊」の役なのではないか、と考える。なお、「坊」は、周一良氏が指摘するように、「軍士編制單位」や「軍營」を意味することもあるが、宮崎市定「漢代の里制と唐代の坊制」(『宮崎市定全集』七、岩波書店、一九九二所収)が論ずるように、官廳の建物やその周圍の牆垣を指す例がある(九五頁)ので、「軍營」に限定せず、「臺坊」を中央の各官廳と解釋した。

(16) 『南齊書』諸本は、「隨才」に作るが、註(15)の濱口氏論文によれば、「隨身」とすべきである(四一〇頁)。

(17) 註(13)所掲の中村氏論文、九五頁を参照。

(18) 『南齊書』虞玩之傳では「板籍官」に作るが、『南史』卷四七虞玩之傳・「通典」卷三食貨三「鄉黨」に従い、「校籍官」をとる。

(19) 註(13)所掲の中村氏論文、九六頁を参照。

(20) 鈴木修「南朝時代の戸籍偽濫について」(『立正史學』六一、一九八七)は、虞玩之の對策の特徴を「法令を厳しく施行すべきことを主張している點にあらう。」と指摘し、「上文の對策を受け入れることによって行なわれた嚴しい取締りが、それまでと比較にならないほど多くの偽濫を誘發してしまつたことを示している。」(四三～四四頁)と述べるが、虞玩之の對策とは單なる嚴しい取締りではなく、實施された政策との間には大きい距離があつたと考える。

(21) 『南史』に「南齊書」にみられない有用な史料がみられることについては、周一良「増加有用史料」(『魏晉南北朝史料記』前掲)四七八～四七九頁を参照。

(22) 「卹を督して小塘をも簡し」の句を、越智重明「宋齊時代の卹」(『東洋史研究』二二―、一九六三)は「卹を督し小塘を簡かにし」と訓讀し、「塘丁がその役の代りに納めた錢を卹とし、その卹を取りたてられるけれども塘の修理にその卹を用いないことを述べている」と解釋した(四八頁)。しかし、「籍を摘して工巧を検し」と對句をなすことから、「簡」はおろそかにするという意味ではなく、検査するという意味

にとって、「卽を督促して小さい塘までしらべた。」と解釋した。

(23) 註(22)所掲論文、四七～四八頁。

(24) 註(22)所掲論文、四〇頁。

(25) 中村圭爾「六朝時代三吳地方における開發と水利についての若干の考察」(『佐藤博士還曆記念 中國水利史論集』所收、國書刊行會、一九八一) 七一～七二頁参照。

(26) 『南齊書』卷三四虞玩之傳にも、

至世祖永明八年、諱巧者戍緣淮各十年、百姓怨望。

とあり、これが事實とすれば、亂後も戶籍検査は緩和されるどころかむしろ強化されたことになる。ただ、この記事は、韓國磐『南北朝經濟史略』(廈門大學出版社、一九九〇)が指摘するように、永明三年以前のことを傳えたもの(八一頁註①)である可能性が高い。亂後、檢籍の緩和が行なわれたことは確かであると考えが、そのような讓歩が武帝政權の根本的方針轉換を示すものでないことは、本文で檢討する顧憲之傳の記事のほか、『南齊書』卷五六倖臣・劉係宗傳の次の記事からも知り得る。

四年、白賊唐寓之起、宿衛兵東討、遣係宗隨軍慰勞、過至遭賊郡縣。百姓被驅逼者、悉無所問、還復民伍。係宗還、上曰、「此段有征無戰、以時平蕩、百姓安帖、甚快也。」賜係宗錢帛。上欲脩治白下城、難於動役。係宗啓諫役東民丁隨寓之爲逆者、上從之。後軍駕講武、上履行白下城、曰、「劉係宗爲國家得此一城。」

(27) 中華書局標點本『南齊書』八〇七頁では、「此詎是事?宜

訪察卽啓。」とするが、朱季海『南齊書校議』(中華書局、一九八四)一〇五頁の指摘のごとく、「事」の下疑問符は、「宜」の下に移すべきである。『梁書』卷三八朱异傳(中華書局標點本、五三九頁)にも、「詎是事宜」の句がみえ、「都合のよいことではないか」という意味である。『梁書』朱异傳の記事は、次のようである。

高祖夢中原平、舉朝稱慶、且以語异、异對曰、「此字内方一之徵。」及侯景歸降、敕召群臣議、尙書僕射謝舉等以爲不可、高祖欲納之、未決、嘗夙興至武德閣、自言「我國家承平若此、今便受地、詎是事宜、脫致紛紜、悔無所及。」异探高祖微旨、應聲答曰、「……今若不容、恐絕後來之望。此誠易見、願陛下無疑。」高祖深納异言、又感前夢、遂納之。

(28)

『南齊書』卷三武帝紀 永明六年八月乙卯の條の詔に、吳興・義興水潦、被水之鄉、賜痼疾篤瘡口二斛、老疾一斛、小口五斗。

とある。なお、同じく永明五年八月乙亥の條の詔にも、

今夏雨水、吳興・義興二郡田農多傷、許蠲租調。

とあり、吳興・義興二郡は、永明五年、六年と二年連續の凶作であったことが判明する。

(29)

『南齊書』卷四〇武十七王・隨郡王子隆傳に、唐寓之賊平、遷爲持節・督會稽東陽新安臨海永嘉五郡・東中郎將・會稽太守。

とある。

(30)

顧憲之の議に、「其の事宜に非ざること、仰ぎて聖旨の如

し。」とあることからみると、武帝も「事宜」ではないと判断したように受け取れるが、「詎是事宜」は、註(27)でみたように、「事宜」ではなからうか、という意味であり、むしろ「事宜」だという考えの方に傾いている。にも拘らず顧憲之はあえて、逆の方向で理解したように述べているとみるべきであろう。

## (31)

この『大學』の「聚斂の臣」批判の文について、山田勝芳「均の理念の展開」(『集刊東洋學』五四、一九八五)は、「鹽鐵論議(前八一)以降桑弘羊流の財政策に反対していた儒家の手によって、この道德主義の下「聚斂の臣」「小人」を激しく排斥する文が作られたものと推測」し、「漢代以來として重要視されてこなかった『禮記』の一篇たる『大學』がにわかに尊重され」るようになったのは、唐の兩税法制定以後、韓愈の時代であり、「事實上財政國家を支えていた財政エキスパートたちに對して、儒學・詩文教養に立脚する科擧官僚たちがあびせる批判・罵倒の言は「聚斂の臣」であった。」と論ずる(一七三—一七四頁)。さらに、東晉南朝時代は、『大學』がそれほど重視されない、『周禮』の時代に屬するが、「晉以上に『周禮』的制度を何らかの形で實施しようとした例は少ない。」(一六九頁)という指摘もなされている。南齊代には、戶籍検査や錢貨吸收等の財務優先の政策を推進する恩倖寒人らに對する批判が顧憲之ら「儒學・詩文教養に立脚する」士大夫たちに根強く存在し、その中で『大學』の「聚斂の臣」批判の文が用いられており、鹽鐵論や韓愈の時代と類似的狀況がみられる。

## (32)

「三五官に屬す」とは、三丁につき一—二丁、五丁につき二—三丁という割合で徵發されて官廳に登録された狀態である。韓國磐『魏晉南北朝史綱』(註(2)所掲)三七八—三七九頁を参照。

## (33)

先に引いた『南齊書』沈文季傳に、  
會稽郡丞張思祖 臺使孔杓・王萬歲・張繇等をして配するに器仗將吏白丁を以てし、永興等十屬を防衛せしむ。  
とみえることも、臺使が郡段階で介在したことをうかがわせる。臺使というと、皇帝の威光をかさにきて威張るというイメージが強いが、反亂の際などには、ここにみえるように、當該地域の都督を兼ねる郡太守(代理)の指揮に従ったのである。

## (34)

「步擔」を百衲本や中華書局標點本では、「步檐」に作るが、殿本・南監本等に従う。尙恆元・彭善俊編『二十五史諸諺通檢』(山西人民出版社、一九八六)が指摘するように、「步檐」では解釋できない(一七三頁)。「會稽 鼓を打ちて卹を送り、吳興 令史に步擔す。」というこの俗諺について、越智重明「宋齊時代の卹」(前掲)は、「豊かな會稽郡では幹僮の役を負擔すべきものが現實には卹を送ってその役を免かれ、一方貧しい吳興郡では現實に幹僮の役を負擔したことを物語っている。」(四一頁)と述べており、基本的にこの理解に従い、「會稽郡では鼓を打って(船を發進させ)卹を送るのに、吳興では令史の指圖で幹僮の役に従い、步擔(肉體勞働)させられている。」という意味に解しておく。『世說新語』豪爽篇の冒頭の逸話の註に、

敦嘗坐武昌釣臺、聞行船打鼓、嗟稱其能。

とみえるように、「打鼓」の鼓は、船で合圖に使用する太鼓であろう。

- (35) 南朝の三吳地方における經濟的發展に言及した論著は、最近の中村圭爾『建康と三吳地方』（唐代史研究會編『中國の都市と農村』所收、汲古書院、一九九二）など、枚舉にいとまらない。

- (36) 蕭子良が「生産者たる農民」が「慢性的な農村の不況に苦しめられ、通貨不足にもとづく貨幣的二重構造によってさらに被害を大きく」とするということ「事態に對して深い洞察力をもつて」、「鋭い現状分析を」行なっていたという指摘は、川勝義雄『貨幣經濟の進展と侯景の亂』（『六朝貴族制社會の研究』所收、岩波書店、一九八二）三七〇頁にみえる。

- (37) 安田二郎「南朝の皇帝と貴族と豪族・土豪層―梁武帝の革命を手がかりに―」（中國中世史研究會編『中國中世史研究』所收、東海大學出版會、一九七〇）の、蕭子良の西邸サロンが士大夫の文化集團だったという指摘（二二七頁）を参照。

- (38) 『梁書』卷三五蕭子顯傳に、

大同三年、出爲仁威將軍・吳興太守、至郡未幾、卒、時年四十九。

とあるのによれば、蕭子顯の生卒年は、四八九～五三七と異なるが、詹秀惠『蕭子顯及其文學批評』（文史哲出版社、一九九四）の考證（三六～四四頁）に従う。

- (39) 趙翼『廿二史劄記』卷九「蕭子顯・姚思廉皆爲父作傳入正史」。王鳴盛『十七史商榷』卷六二「豫章王嶷傳與齊書微異」

等も参照。

- (40) 拙稿『沈約『宋書』の史論（四）』（『北海道大學文學部紀要』四四一～一九九五）三九～四四頁を参照。

- (41) 拙稿『沈約の地方政治改革論』（中國中世史研究會編『中國中世史研究續編』所收、京都大學學術出版會、一九九五）を参照。

- (42) 吉川忠夫「沈約の傳記と生活」（『六朝精神史研究』所收、同朋舍、一九八四）二一〇～二二三頁、安田二郎「南朝の皇帝と貴族と豪族・土豪層」（註（37）所掲）二三五～二七頁等。

- (43) 詹秀惠「蕭子顯及其文學批評」（註（38）所掲）七八頁。

- (44) 趙吉惠「南齊書」（『中國史學名著評介』第一卷所收、山東教育出版社、一九九〇）二九一頁。王永紅「南齊書」（『二十五史導讀辭典』所收、華齡出版社、一九九一）は、天監十三年（五一四）以後、普通七年以前とする（三一四頁）。

- (45) 「貨幣經濟の進展と侯景の亂」（註（36）所掲）三七〇頁。

- 武帝即位當初の民政については、安田二郎「南朝の皇帝と貴族と豪族・土豪層」（註（37）所掲）二二六頁も参照。

- (46) 「梁の中書舍人と南朝賢才主義」（『名古屋大學東洋史研究報告』一〇、一九八五）五四頁。

- (47) 王儉については、狩野直禎「王儉傳の一考察」（川勝義雄・磯波護編『中國貴族制社會の研究』所收、京都大學人文科學研究所、一九八七）を参照。

- (48) 註（21）所掲「増加有用史料」四七九頁。

(49) 趙翼『廿二史劄記』卷九「蕭子顯・姚思廉皆爲父作傳入正史」。

(50) 『南齊書』卷五六倖臣・茹法亮傳に、

宋大明世、出身爲小史、歷齋幹扶。孝武末年、作酒法、鞭罰過度、校獵江右、選白衣左右百八十人、皆面首富室、從至南州、得鞭者過半。法亮憂懼、因緣啓出家得爲道人。明帝初、罷道。

とあり、劉宋時代、一時出家したことから「法亮」と呼ばれ

たので、元來「亮」という名ではなかったか、と考えられる。「法」が佛教とかかわることについては、宮川尙志「六朝人名に現れたる佛教語（四、完）」、『東洋史研究』四一六、一九三九）七九頁を参照。

(51) 南朝における國家意志決定の公式の制度である「議」については、中村圭爾「南朝における議について―宋・齊代を中心に―」（『人文研究』四〇―一〇、一九八八）を参照。

values. However, the colleague society of the Ming Shi was firm, and as Cao Pi 曹丕 struggled for leadership position against the literarily talented Cao Zhi 曹植, Cao Pi gradually began to regain respect for Confucian values. Moreover, the fact that Cao Pi's sovereignty was justified by Confucian values made clear the superior position of Confucian values over "literature". As a consequence, Confucian values were used as a standard of promotion for talented members in the Jiu-pin Guan-ren-fa 九品官人法, which was established in the period of change from Han 漢 to Wei 魏. Thus, the colleague societies of the Ming Shi class came to form an aristocracy supported by Confucian values.

## THE REBELLION OF TANG YU-ZHI 唐寓之 AND THE SHIDAFU 士大夫

KAWAI Yasushi

Most previous studies of the Tang Yu-zhi Rebellion, which occurred on the west coast of Zhejiang 浙江 in 485 A. D., have focused on the question of whether or not this can be considered as a rebellion of the peasantry. However, it is the opinion of this author that a group of sailors and merchants formed the core of this rebellion. At that time, the Nan-Qi Wu-di 南齊武帝 government, in an effort to secure a sound financial basis, had carried out a close census of taxpayers and had increased the circulation taxes. The great increase in circulation taxes may have placed a heavy burden on sailors and merchants, who had been omitted from the census. Although forming the rearguard rather than the vanguard, peasants and wealthy farmers who were discontented with the close census also took part in the rebellion, swelling the rebel army from 400 to 30,000 persons. This rebellion was suppressed by the Imperial Guards, however, the Nan-Qi Wu-di government, which was under the control of the emperor's favorites, was opposed to the Shidafu faction, which included some Imperial princes and officials, on the issue of measures devised to deal with this rebellion. Even in the period before this rebellion, the Shidafu had

sharply criticized the fact that the tax increase weighed heavily on the public welfare, and they had demanded a tax reduction. However, the Nan-Qi-shu 南齊書, which includes detailed documents of this rebellion, emphasizes the opposition between the Nan-Qi Wu-di government and the Shidafu faction, in light of the Shidafu. Therefore, we cannot place absolute trust in the Nan-Qi-shu as a documentary basis.

## QUALIFICATIONS OF SHIDAFU IN THE SOUTHERN SONG DYNASTY

NAKASUNA Akinori

Many manuals and catalogues were written and published in the Southern Song dynasty. In order to attain success in the examinations, a scholar had to know how to read the canons and famous writings of the era, as well as how to compose prose and poetry that would attract the attention of the examiners. To be considered a Shidafu, a man had to be skilled at the production of many styles of composition. Moreover, potential Shidafu were to practice a respected hobby, and were supposed to be able to discern the genuine from the spurious.

However, examples of “genuine Shidafu” are rarely to be seen. Candidates for membership in the class of Shidafu needed to know a “norm” for qualification, and even during the Southern Song, the “norm” developed in the shaping. The many manuals and catalogues produced met the demands of this age.

Zhu-zi’s school was opposed to study solely in order to attain success in the examinations, and instead advanced techniques for reading books and self-cultivation. Zhu-zi, however, met the demand of this era in his style. As a result, his texts were enthusiastically sought, and the reading and usage of these texts went beyond his control.

Both the speed of production and the pace of consumption of the manuals that presented the norms and techniques are characteristic of the Southern Song era.